

マイスター・エックハルトの
非キリスト教的解釋の可能性

南 原 實

中世に大膽な思索をしてカトリック教會から異端のそしりをうけたエックハルトの名は、日本でもよく知られている。ナチの時代に、一部の學者から喧騒されたばかりではない。最近、とくに佛教學者から興味を持たれている。エックハルト——ひいてはドイツ神秘思想に、アジアの形而上學と相通するものがあると考えられるためであろう。そのキリスト教的人格神を超越した神性ともいべきものが、ヨーロッパの宗教・哲學の中心をしめる「存在」とか「有」ではなく、それらを超えた概念・象徴で記されているためか。それが、いわゆる西田幾多郎の「東洋的無」と同一視されるからか。

—

エックハルトを中心とするドイツ神秘思想と東洋の形而上學との類似を發見したのは、もともとヨーロッパの哲學者たちであつた。佛陀の教えとエックハルトの説くところが同じである

マイスター・エックハルトの非キリスト教的解釋の可能性

と、ショーペンハウアーがはじめて指摘した(全集ドイセン版第二卷七〇三頁)。それより前に、フリードリッヒ・シュレーゲルは、ドイツ中世神秘思想家に、「インド精神に特有な汎神論的な否定と自己否定の影」を見出した(全集一八二二年版第二卷七〇頁以下)。「宗教哲學」で只一回エックハルトの名を擧げたにすぎないヘーゲルは、フランツ・バーダーから、この神秘思想家のことを詳しく知らされ、「こゝに(エックハルトの神秘思想に)こそ、私たちの求めたものがある」との有名な言葉を残した。ヘーゲルの弟子、ローゼンクランツ、エルトマン、マルテンゼンなどは、この言葉に刺戟され、とくにマルテンゼンは、エックハルトの神秘思想をはじめて體系的に描いてみせて言う。「エックハルトによれば、この世にあるものすべては、無常な偶然の出來事にすぎない。唯一なるものの定めなき通過點、はかなく消えさる影にすぎない。この否定的な過程こそ、汎神論に無常觀、また宇宙否定論的な色彩を與える」(マイスター・エックハルト、一八四二年三四頁)。マルテンゼンは、さらにエックハルトのいわゆる神に先立つ永遠な「無」に心ひかれてゐる。

エックハルトを中心とするドイツ神秘思想の再發見によつて、ヨーロッパの思惟のなかに、アジアの世界で宗教と名づけられるものが何であるか、臆氣ながら明かになつてきたように思われる。十九世紀におけるヘーゲル傳統の代表者ラッソンは、すべての生起せるものが、「成らざる無」の中へ沈み込み消え去ることにこそ、エックハルトの教えの核心があると考へ

た。「かくて、この純粹無垢なる無こそ、最高、最善なれ。もろもろの憧憬の的なれ」(マイスター・エックハルト一八六八年一一二頁)。

しかし、十九世紀のはじめに始まるエックハルト解釋の歴史では、「神は無なり」という非キリスト教的な定義に、「神は有なり」という解釋がたえず對立してきた。早くも、ラッソんに反對して、「中世ドイツ神秘思想史」の著者ブレーガーは、「存在する」神が無に解消されるのを防ぐとし、エックハルトをキリスト教的に解釋するのに全力をそそいだ。更に、リンゼンマン、バツハなどのエックハルト研究家は、一度は教會から破門されかけたこの神秘思想家をカトリック教會のために救おうとした。「神は無なり、との言葉の眞意はどこにあるのか。神は有ではない、と言えば、それは神から有を否定したのではなく、有を高め、價值あらしめたのである」(バツハ、マイスター・エックハルトとドイツ的思辨の父、一八六四年六七頁)。

初期の非キリスト教的解釋は跡をたち、正統的エックハルト像が決定的になつたなかで、いまから二十數年前、エックハルトの神秘思想の中心は「有」ではなくて「有を超えたもの」であると、グラープマンによつて一度主張された(Neu aufgefunden Pariser Questionen Meister Eckharts, Abh. d. Bayr. Akademie d. Wiss. Philos.-philol. u. hist. Kl. 32, 1937, Abh. 7)。しかし、これに反對して、今日もつと新しい研究の一つであるシュモルト「エックハルトの語彙」は言う。グラ

ープマンは、Puritas essendiを「あらゆる有を離れた純潔」と譯し、神は有を持たないと考えたが、本當には有の純潔を意味するのであり、認識がPuritas essendiなのである。こうして、有と非有という神についての矛盾する定義は、認識と有が同一なることから由來するから、神について有が否定されたわけではない。(Berno Schmoldt, Die deutsche Begriffssprache Meister Eckharts—Studien zur philos. Terminologie des Mittelhochdeutschen, Heidelberg 1954, 百頁)。

されば、今日、鈴木大拙が、そのMysticism: Christian and Buddhist, N. York 1957のなかで、「佛教徒マイスター・エックハルト」を語るとすれば、現在ヨーロッパのエックハルト研究の視野からみれば殆ど荒唐無稽に思われるこの解釋には、一つには、いまから百年ばかり前にブレーガーが語つた批判があてはまるであろう。「エックハルトの大膽不敵な言葉は、エックハルトの思想體系全體を正しく理解してのみ正しく解釋され得る」(Ein neuer Traktat Meister Eckharts und die Grundleitungen der Eckhartschen Theosophie, Zeitschrift für hist. Theol., Bd. 34, 1864, 二〇三頁)。また、他方では、デニフレの言葉が参考とならう。「一つ一つの原典の批判的な研究がなされることなく、特殊なものは輕視されて一般的なもののみ取扱われ」(Buch von geistlicher Amnuth, IX頁)。

デニフレは、そのころ新しく発見されたラテン語のテキストを據り所として、それまでの主觀的恣意的なエックハルト解釋

を批判したのであったが、今日ラテン語の著作全集が出版されるにこれ(Die lateinischen Werke Meister Eckharts, Hrsg. im Auftrage der Deutschen Forschungsgemeinschaft von Konrad Weib, Joseph Koch u. a. 1937 ff.)のラテン語の批判は、至當であるとの印象が強まるばかりである。ラテン語の著作では、エックハルトは「有」の形而上學を語り、「神性の無」などという表現は、少くとも「神の根源」は「有」として見あたらぬ。「無」は「有」に「神の根源」であり、また「否定」と「多」の根源ともなる(Serm. VIII n. 90)。「無」ほど醜いものはない(Serm. VI 2 n. 57)。

エックハルトの異端的な解釋がその根據を失つたのは、ラテン語で、神學・哲學的な理由によるばかりではない。ラテン語の原典が新しく發見されるにつれて、今迄のエックハルトのドイツ語全集——今日に至るまでも唯一のエックハルトの全集¹⁾、フアイファー版の權威がゆらぎはじめた。ショーペンハウアー以來、エックハルトの非キリスト教的解釋の根強い地盤となつていたフアイファー版の不正確、不完全さは、ハーンケ、ヘンゲル、シュパーマー、シュトラウホフ、フアルナー、スクテラ、クイントによつて指摘され、ことに異端的な解釋をゆるす原典の眞性が疑われ出した。

「エックハルトの非キリスト教的な解釋は、神學・哲學的な論争をゆるす以前に、その原典の眞偽をめぐつてゆきまはられ続けてきたのである。エックハルト解釋の問題は、神學・哲學的である前に、まづ根本的にテキストの問題なのである。まづ文献

學的に正しくなければならぬ。ハーンケにはじまるエックハルト研究は文献學的であるが、これは同時に、エックハルトの神學・哲學の問題は、言葉の問題と切り離せぬものだと示してゐる。(エックハルトを中心とするライオン神秘思想を言葉の面から捉えようとした澤山の文献のうさかの「く」が例をあげれば、E. Kramm, Meister Eckharts Terminologie in ihren Grundzügen dargestellt. ZfPh. 16 (1884). O. Zinker, Die Bereicherung des deutschen Wortschatzes durch die spätmittelalterliche Mystik. 1923. G. Lüters, Die Sprache der deutschen Mystik des Mittelalters im Werke Mechthilds von Magdeburg. 1926. H. Kunisch, Das Wort „Grund“ in der Sprache der deutschen Mystik des 14. u. 15. Jahrhunderts. 1929. C. Kirmsze, Die Terminologie des Mystikers Johannes Tauler. 1930. H. W. Hagen, Mystische Weltanschauungsform und ihr Ausdruck in der Salgebung. ZfPh. 58 (1933). Th. Schneider, Der intellektuelle Wortschatz Meister Eckharts. 1935. K. Berger, Die Ausdrücke der Unio mystica im Mittelhochdeutschen. 1935. H. Kunisch, Spätes Mittelalter in „Deutsche Vorgeschichte I“. 1943. J. Quint, Mystik und Sprache. Ihr Verhältnis zueinander, insbesondere in der Spekultativen Mystik Meister Eckharts. DVJS 27 (1953). B. Schmoldt, Die deutsche Begriffssprache Meister Eckharts. Studien zur philos. Terminologie des Mittelhochdeutschen. 1954.)²⁾ 研究の大部分は、獨語獨文學者によつてなされて来た。

文献學的な研究が進むにつれて、プファイファー版による解釋は、殆ど意味を失つた。いわんや、エックハルト像を一般啓蒙的にひろめるに寄與したビュットナーの現代語譯を用いてエックハルトを論ずるとすれば、初歩的な誤りを犯すことにならう。エックハルトが論ぜられるわりに、テキストの基礎的な知識が日本には缺けているように思われる。これは、エックハルトをとくに現在解釋するうえで、致命的である。かなり前から、エックハルトの名が知られているにも拘らず、エックハルトの日本語譯すら殆どないにひとしい。

日本に知らなければいくつもの譯があるとはいへ、英譯にたよるのもよくない。ひろく知られている G. de B. Evans の英譯は、プファイファー版の譯（しかも省略あり）であつて、誤りも多い（例えば、三一三頁など）。こういう誤譯から、ヒューゲル、A・ハクスレイ、イングのような神秘思想研究家は、誤つたエックハルト像を引きだしたのである。現代譯という R・B・ブレイクニーの譯（一九四一年、一九五七年再版）は、プファイファー版に批判的といふもの（また辯明書を含む）、エヴァンスのものにくらべて殆ど進歩がない。アメリカ調の英語で書かれたこの本は、ビュットナーの英譯のような感じを興えるにすぎない。（このような状態は、戦後の新しい英譯によつて改められてつゝある。The Great German Mystics, Eckhart, Tauler and Suso, Oxford 1949 の著者であるジェームス・M・クラークの Meister Eckhart, Cambridge 1957 は、僅か二十五の説教と一三二七年二月一三日の辯明書とヨハネ法王の

教書を含むにすぎないが、唯一の信頼できる英譯である。一二四頁にわたる解説があり、英語の讀者はエックハルトを理解するうえのよい手引きを見出すであらう。ドイツ語の現代語譯には、クイントのものがある（J. Quint, Meister Eckhart, Deutsche Predigten und Traktate, München 1955）。テキストの眞偽については一切の論評をひかえたものであるが、いままでの譯の誤りをただした便利なものである）。

二

さて、エックハルトを非キリスト教的に解釋する餘地は、現在残されていないであらうか。注意すべきことが、いくつかあると思われる。

一、第一に、エックハルトのドイツ語の原典研究は、まだ完成には程遠いことを忘れてはならない。クイントによつて一九三六年以來企てられているドイツ語の全集は、最近、やつと第一巻が完決したばかりである（Meister Eckhart, Die deutschen Werke, hrsg. von J. Quint im Auftrage der Deutschen Forschungsgemeinschaft, 1936 ff.）。プファイファー版が信用できないことは明白な事實であるが、いままでにクイントによつて出版された僅かのテキストがエックハルトの像すべてを伝えると言いきれないことも、同じように明白である。プファイファー版が疑われていることは、傳わる膨大な古寫本すべての眞正が否定されたことを意味しない。また澤山の古寫本の輻輳のために、エックハルトのものかどうか結局きめ手のないテキスト

も出てくるものと豫測される。

二、思いがけず新しくラテン語の原典が発見され、これは眞作であることが確實なため、ラテン語のテキストが重視され、ドイツ語の原典もラテン語のものとの比較においてのみ正しく解釋されうるとの見解がとられた。しかし、いまエックハルトの自作であることが確實視されている僅かのドイツ語の原典を、ラテン語のものにくらべてみよう。ドイツ語の説教にはまさに「無」の象徴である「闇」、「奈落の底」、「砂漠」などについて、ラテン語の原典と正反對の解釋がある。例えば、ラテン語で書かれたものでは、主に「惡の闇」が語られているが、ドイツ語の説教では、「かくれたる父なるもの闇」と言われ、神の底の底を意味する。また、唯一カ處であるが、神とは何ぞ、との問いに、神は何物でもなく「無」であると言う（全集第一卷四〇二頁第二行）。

三、ラテン語の原典を重視する、いままでのエックハルト研究の根本態度とあいまつて、エックハルトは、スコラとの關係を正しく理解してのみ正しく解釋され得るとの見解がとられてきた。（こゝに W. Bangs, *Meister Eckeharts Lehre vom göttlichen und geschöpflichen Sein*, 1937 を見よ）。しかし、エックハルトの神秘思想は、あくまで新プラトンのものでもあつて、スコラの教學との關係を強調することは、エックハルトの神秘思想の平面化を意味しよう。（エックハルトの新プラトンの面をとくに指摘したのは、エーリッヒ・ゼーベルクであり、最も新しい研究の二つとして A. Auer, *Eckhart = Probleme*,

Salzburger-Jahrbuch f. Philosophie u. Psychologie Bd. 2, 1958 がある）。

四、エックハルトの周邊、またそれに續く神秘思想家の多くの古寫本に「無」の思辨、その象徴が見出される。ひいては、ヴァイゲルやチェプロに及ぶエックハルトの後継者たちが、「無」について思索を重ねながら、エックハルトを「無」の師匠としていることは、どう解釋されるべきであろうか。

テキストの問題は片づいていず、またきめ手のない今日、エックハルトの後継者の「無」がある。他方、エックハルト以前、プロティン、ディオニシウス・アレオパギータ、ヨハネス・スコートウス・エリウゲナなどに「無」の思辨があるとすれば、このいわゆる「無」の傳統を明かにすることによつて、エックハルトの「無」を推測するのは、一つの可能性であろう。もし、テキストの整理された將來、エックハルトは異端ではなく正統派であることがわかつたならば、エックハルトの後継者たちは、とにかくヨーロッパにおける「無」の傳統に正しくもとづいているということが出来よう。また逆に、もしもエックハルトにやはり「無」が見出されることになれば、それはこの「無」の傳統の中の大きなつぎ目が見つかることを意味しよう。

三

「有」を超える絶対者の規定は、もともと新プラトンのである。エックハルトは、新プラトン思想をディオニシウス・アレ

オパギータとアウグスティヌスという二つの系統から受けている。プロティンから一方ではアウグスティヌス、他方ではアレオバギータへ續くこの二つの系統は、全く異質である。ヨセフ・ロツホは、その優れた論文 *Augustinischer und Dionysischer Neoplatonismus und das Mittelalter*, Kant = Studien Bd. 48 (1956-57) べんこの二つの流れが相違することを立證した。ディオニシウスに受けつがれたのは、プロティンの神秘思想の中心概念「一者」であり、これはエリウゲナからエックハルトへ至る。アウグスティヌスがプロティンの形而上學に見出したものは、それとは縁もゆかりもない三位一體論である(懺悔録第七書)。

さて、この「一者」は、キリスト教的な、あるいはギリシヤ的な意味における絶対有であろうか。筆者の考えによれば、ここにいままで餘りかえりみられなかつた大きな問題があると思われる。プロティンでは、一者は「存在」を超越する。一者は、*ousia* でも *enon* でもない。單純そのものである。一者はエイドスではなく、したがつて如何なる意味においても規定することが出来ない。それ故、「有」(*ousia*) ということとはあり得ない(Enn. V 5 6)。絶対者の超越とは、「有」に對しての超越なのである。それ故、絶対者は……である(*enon*) ということも許されな。プロティンは、繰返し述べてゐる(Enn. III 8 10. VI 7 28. VI 8 8 などを見よ)。また、プロウロスによれば、「有とか、またありとまらゆる有るものを超越する第一の原因が、有るといふのは誤りであらう」(Comm. Parm. 1240)。テュオニシウス・アレオバギータによれば、絶対者と

は、「すべてのものを成立せしめている存在の根底、しかもそれ自らは、ものではなく存在するものではない」(de div. nom. c. 1. 1)。

ヨーロッパのプロティン解釋の歴史をみると、この有の否定である「一者」を、有の否定として把握するのが、ヨーロッパの思惟にとつて、如何に困難であるかがわかる。例えば、ヘーゲルによれば、プロティンの「一者」とは、純粹なる有である(全集十五卷四七頁以下)。しかし、プロティンによれば、有は思惟であり、思惟の上位にある一者は、如何なる意味からも有を超越する。

ヨーロッパの神學・哲學にも、神を否定的に呼ぼうとする試みはある(これは、筆者のみるところによれば、アレキサンドリアのフィロにはじまる)。しかし、ここに注意すべき問題は、この絶対者の否定的な表現が佛教的なものと全く異なる根本態度から由來するという點である。いわゆる否定神學にあらわれている否定は、人間に對する神の絶対性を強調するためである。

絶対者は全き他者 *altepou toj Deou* である。マールブルクの神學者オットーやハイラーは、被造物に對する「全き他者」である絶対者の否定的表現に、東西神秘思想の共通點を見出さうとしたが、これは正しいと思われな。 (R. Otto, *Das ganz Andere in außerchristlicher und christlicher Theologie*. In: *Das Gefühl des Überweltlichen* S. 212 ff. Fr. Heiler, *Der Gottesbegriff der Mystik*. In: *Namen International Rev. for the History of Religions* 1954. S. 167 f.)

なぜならば、プロティンからはじまるこの有の否定とは、否定神學のなかでも特殊の領域である。無は、有に對立するものではなくて、特殊なものを普遍的なものに解消することにある。プロティンの「二者」とは、われわれ認識する者にとつて規定できないもの——すなわち、われわれにとつて有を超えようように見える。本當は有なる他者ではなくて、それ自身いかなる意味においても有ではない。そして、すべての有は、この「二者」から流れ出し、人間の魂は、神秘的合一によつてこの有を否定した一者に還り、また、萬物の有がこの一者に還元するのを助けるのである。さらに、ディオニシウス・アレオパギータによれば、「無」は、有に對立する非有ではない。神は、有るものでもなければ、また非有なるものでもない *oûdē ti tōu oûdē strom, oûdē ti tōu strom êstin* (de myst. theol. c. 3)。

このギリシヤ的でも、またキリスト教的でもない、極めて非ヨーロッパ的な思考は、果してインドの形而上學、とくに佛教と關係があるであろうか。これは、いまから三十年ほど前、エジプトではじめてマニ教の創始者マニの全著作のペピルスが、カール・シュミットによつて偶然発見されてから、ようやく注目された問題の領域である (Carl Schmidt, *Neue Originalquellen des Manichismus aus Ägypten*, ZKG Bd. 3 (1933))。エジプトで生涯の大半を過したシュミットは、それ以前に數多くのグノーシスの原典を発見している。例えば、グノーシスが生れたアレキサンドリアなどは (ヨーロッパにおける「無」は、筆者の知るかぎり、紀元後二世紀の後半アレキサンドリア

で活躍したバシリデスにはじまる)、インドとの交渉地點として、精神史的にもおそらくもつと重要な位置を占めるのではあるまいか。また、いままでキリスト教的にのみ解釋されてきた思想家は、非ヨーロッパ的なもつと他の視野による解釋を許すのではないだろうか。この方面の興味ある論文としては Ernst Banz, *Indische Einflüsse auf die frühchristliche Theologie*, *Abh. d. Akad. d. Wiss. u. Literatur. Geistes- u. sozialwiss. Kl.* 1951 があつて。

プロティンに續くプロクロス、ディオニシウス・アレオパギータ、ヨハネス・スコトウス・エリウゲナなどの一連の特殊な思想家、乃至神秘思想家についての文献は、ヨーロッパに數が少い。これは、ある意味では、ヨーロッパの神學・哲學研究の盲點とも言えよう。ディオニシウス・アレオパギータについては、一九〇〇年に出た H・コッホの「ディオニシウス・アレオパギータ」がいまなお唯一の主な文献である。原典そのものの研究は、テリーのものなどいくつかある。因みに、トリッチェの最近のドイツ語譯は、P G の譯というものの、原典のかけを傳えぬほど勝手氣儘に譯されていて信用できない (Mystische Theologie, *Die Hierarchien der Engel u. der Kirche* übers. von W. Trisch, 1955—56)。期待されるのは、ケルンのトーマス研究所關係の人たちによつて企てられているディオニシウスの全集である。ギリシヤ語の原典とならべて、中世における多くのラテン語譯を印刷してある。極めて重要である。エリウゲナの「無」の概念やその象徴に關する纏つた文献は、筆者の知るか

ざりては未だない。エリウゲナの形而上學全體のもつともよい描寫は、*Mr. Cappuyns, Jean Scot Erigene, Louvain 1933* である。原典は、P L 版があるのみ。

ディオニシウスの「神祕神學」をラテン語に譯したエリウゲナは、キリスト教界では例のないほど大膽に「無」——とくにその象徴「闇」「砂漠」「奈落の底」を開陳した。もともと聖書に由来するこれらの象徴のエリウゲナによる解釋は、ドイツ語の説教にあらわれているエックハルトのそれと殆ど完全に一致する。「大地は荒涼として空しく」(創世記第一章二節)は、アウグステイヌスにとつては、神の手の加わつていない物質の聽さを意味するが、エリウゲナは、ここに「形なき神祕なる底の底」——森羅萬象の生れる前の根源を見る (de div. nat. II c. 16 c. 17 など)。「闇」とは、この根源の「あり」としめる思惟を超越した高み」であり、光に先立つはじめである(同書 II c. 25)。闇のただよう深淵とは、「無限にして、不可解な奈落の底」である(同書 III c. 19)。これらの象徴の背後にあるのは、「無」の思惟であり、神は、總體でも部分でもなく、また類でも形でもないが、何よりも「有」ではないのである(同書 II c. 28)。「神は萬物を無より創造したり。されど、この無は神そのものに他ならぬなり」とベネーは繰返し述べているが(Sig. rer. c. 6. 8)「これは既にエリウゲナの語つてゐるところである (de div. nat. III 22 など)。

マルティン・グラープマンは、エックハルトの滞在した十三

世紀のソルボンヌの奇妙な状態を克明に描き出した。このころ勢力をもつていたアラビア人の哲學者たちは、いづれも新プラトン主義者であり、プロクロス、またその *prolegomena* *Boetijuch* が流行した。いままで餘り顧みられなかつた重要な新プラトン派の書物に、いわゆる「アリストテレスの神學」がある。ごく最近まで、ラテン語譯しか知られていなかったが、新しく發見された原典には、明かに「無」について語られている。「この言葉は自ら動かず、ざりとてまた休むこともなく、靜寂も動きも超ゆるが故に……無と名づけられたり」。アルファラビーの傳えるところによつても、「アリストテレスの神學」は無よりの創造と神の本質の教えが同一なのを説き、したがつて神の本質とは、すべてのものが創られた無と同じであるという (Mediaeval Studies in honor of J. D. M. Ford 1948 のなかの H. A. Wolfson, The Meaning of Ex Nihilo in the Church Fathers, Arabic and Hebrew Philosophy p. 358 f. を見よ)。

この考えは、ユダヤ教と新プラトン思想との奇妙な結合である(のちのカバラの項を見よ)。エックハルトは、否定神學をディオニシウス・アレオパギータとユダヤの神祕思想から受けついでいる。エックハルトにとつて、マイモニデスは、アウグステイヌスとならぶ權威である。神の背後にある神そのものという考えは、既にアレキサンドリアのフィロにある。エックハルトとユダヤの宗教哲學との關係を扱つたものには、J. Koeh, Meister Eckhart und die jüdische Religionsphilosophie des Mittelalters. Jahresbericht der Schlesischen Gesellschaft für

vaterländische Kultur. 1928 年 6 月 20 日

四

エックハルトの「無」の推測を裏づけるものとして重要であり、またいままで餘り注目されなかつたものには、エックハルトの周邊から生れた三位一體の詩 *Grannum sinapis* があり、ここには神性の「無」、またその象徴である「闇」「奈落」「砂漠」などの表現が豊富に見出される。この詩は、いままで一部しか印刷されたことがなく、その時の古寫本は既に失われた。現在あるのは、Hss. Nürnberg, Stadtbl. Cent VI 54 303a—321r 及び Karlsruhe Nr. 1222. 6v—67r であり、未だ發表されていない。この詩については、ラテン語で書かれた注釋書があり、最近出版された (M. Bindschedler, *Der lateinische Kommentar zum Grannum sinapis*, Basel, 1949 既に絶版) の注釋書は、かなり正確にそれぞれの思想の典拠をあけている。それによれば、一方には、トーマスがあり、他方では、ディオニシウス・アレオパギーター—フーゴー・フォン・St. ヴィクトール—トーマス・ガルス、また、オリゲネス—マキシムス・コンファエソル—ヨハネス・スコートウス・エリウゲナの系統がある。エックハルトのいわゆる「無」を歴史的に理解するうえに興味がある。この詩の作者は不明である。エックハルト自身の作と見なした最初は、F. Bech, *Grannum sinapis*, Programm d. Königl. Stifts-Gymnasium, Zeitz 1833 年 6 月 20 日。作られた年代は、推測によれば一三〇〇年頃。文献としては、M. Bindschedler, *Griechische Gedanken in einem mittelalterlichen Gedicht*, Theolog. Zeitschr. Basel 4 (1948) H. 3 年 6 月 20 日。

「闇」とか「砂漠」とか「奈落」のような否定的な象徴は、それより前、メヒトヒルト・フォン・マグデブルクの「神性の流れる光」に見出される。この象徴は、前にあげた、Lithers の著書のなかに集められている。この女流神秘思想家のテキストは、モレルが一八六九年アインジールデルンの古寫本 I—VII をそのまま印刷したので、校合本ではなく (P. Gall-Morel, *Offenbarung der Schwester Mechthild von Magdeburg oder das fließende Licht der Gottheit*, Regensburg 1869) のほか多くの流布本、またラテン語版、その低アレマン語譯などがあり、この方の専門家 H・ノイマンによる校合本が出るのが期待される。原典の研究状態を知りたいものは、Hans Neumann, *Beiträge zur Textgeschichte des "Fließenden Lichts der Gottheit" und zur Lebensgeschichte Mechthilds von Magdeburg*, Nachrichten d. Ak. d. Wiss. in Göttingen, Philol.-hist. Kl. 1954 Nr. 3 を見よ。

幻影に屢々エックハルトの姿を見て問答をまじえる、ハインリッヒ・ゾイゼは、エックハルトが破門されたのも意とせず、その大膽な思想に共鳴し、「無」の思辨に溺れた。これを如實に示すのは、ゾイゼの「生涯」ヴィータであつて、もともとこれはボナヴェントウラの神の存在の讃歌をドイツ語に譯すつもりであつたのが、結局神の無という正反對の考えに終つている。ゾイゼにおいて、「無」、またその象徴の繰返されるのは、ある

マイスター・エックハルトの非キリスト教的解釋の可能性

特定の箇處——時期的にもとくにエックハルトと關係があつたと考えられる箇處のみである(ヴィータの終りに近い章、眞理の書、書簡二二及び二五)。この「無」の思辨の内容についての研究は、筆者の知るかぎりでは今日までない。エックハルトととくに關係があると認められ、「無」の解釋で極めて重要なヴィータは、一八八二年以來その眞偽が論議されていて、今日もなお活潑である。コンスタンツの郷土史に精通していて、この方面からもヴィータの眞正を證明しようとしたグレーバーなど、眞正を主張するものにはカトリック側の學者が多い。グレーバー自身、ヴィータがゾイゼ自身の手になるものと確信しているが(一八二頁)、第三者の手が入っていることは認めてい(一七七頁以下)。Conrad Gröber, *Der Mysteriker Heinrich Suse. Die Geschichte seines Lebens. Die Entstehung und Echtheit seiner Werke. Freiburg i. Br. 1941*。ヴィータの眞偽の問題をめぐつては、戦後 Julius Schwiechings, *Zur Autorschaft von Susens Vita. In: Humanismus, Mystik und Kunst in der Welt des Mittelalters*, Hrsg. von J. Koch, Leiden-Köln 1953 がある。因みに、ゾイゼのテキストとしていままなお信用できる唯一のものは、K. Böhmeyer 版(一九〇七年)である。今日、殆ど入手の可能性はない。

ヨハネス・タウラーについては、事情は一層複雑である。タウラーは、一般に實踐的・倫理的な神秘思想家であると思われている。例えば、ヴェンツラフ = エゲムルト「中世末期から近世はじめへかけてのドイツ神秘思想」の中のタウラーの章を見

よ。しかし、筆者の見るかぎり、これはタウラーの一面を伝えるにすぎない。とくに「無」に關しての思辨的性格が強い。たとえば、その神の深淵の描寫は、ペーメの深奥で底のない神の描寫を凌ぐと思われるばかりである。

「たとえ千里あゆもうとも、この奈落の底に達することは出来ない。この深淵にひろがる廣さは、渺として、姿もなければ形もなく影もない。このこということもなければ、そのこということもない。なぜならば、それは底なく自らたどよう底なき深淵なのだ。水は押しではかえし、奈落の底へ吸い込まれ跡形もなく干上るとみれば、忽ちまた溢れ出し、森羅萬象はそのなかに呑み込まれるかと思われる。天に神がましますのではない。また、萬物のなかに神がいますのでもない。神の座は、この深淵の中にある……。この奈落の底には、この世の光もとどかず、照らすことも出来な。なぜならば、神はここにまします。神の座はここにゐるのだ。この深淵をきわめることも、また充すことも被造物には出来ない。ただ神のみこれを満すことが出来る。この深淵にふさわしいものは、ただ神の深淵のみ。奈落の底は、奈落の底を呼ぶ」(フエッター版、三三一頁)。

もともと、實踐的・倫理的な神秘思想家としてのタウラーの評価は、十五・十六世紀の誤つた見方にもとづいていて、いかにタウラーの研究が進んでいないかを示している。タウラーの研究書は、一九三九年の *Wenzlaff = Eggebert, Fr.-W., Studien zur Lebenslehre Taulers. Abh. d. Preussischen Akad. d. Wiss. 1939. Phil.-hist. Kl. Nr. 15* を最後として、筆者の見る

かぎり一つも出ていない。

タウラーは、敬虔な僧侶として、プロテスタント、カトリック、敬虔主義者に根強く廣汎な影響を與えたのである。その古寫本、また印刷された流布本の種類も、極めて數が多い。したがつて、タウラーの「無」に関する思辨もかなり廣く流布されたわけである。また、皮肉なことには、例えばタウラーの名のもとに收められた一五二一年のパーゼル本には、エックハルトのものがいくつか入つていて、その大膽な思辨は敬虔なキリストの弟子の書という衣をかぶりながら、のちの神秘思想家(ヴァイゲル、チェンコーなど)に、キリスト教の信仰とは縁もゆかりもない影響を及ぼしている (Baseler Taulerdruck 1521, fol. 306va—308rb)。タウラーの研究は、まだ殆ど手をつけられていないと同様なのだ。傳つているタウラーの古寫本の量も、エックハルトのものより遙かに膨大で複雑である。いつ原典の校合本がでるか、少しも見通しがたつていない。フェッターのテキストは、唯一であるが不完全である (Die Predigten Taulers, Hrg. von F. Vetter, 1910)。タウラーの文献學的な勞作としては、リーフティンクが一九三六年に發表したものがあつたのである (G. I. Lieftinck, *De Middelnederlandsche Tauler-Handschriften*, Groningen, 1936)。

このように、ドイツでは、神秘思想の研究が沈滞しているのに反して、オランダでは、ここ数十年來、オランダ神秘思想の分野がすばらしく開拓されている。その例をあげるならば、もつとも一般的な人氣のある神秘思想家の一人、メヒトヒルト・

フォン・マグデブルクの原典の決定版がまだドイツでは出ないのに對して、オランダでは、同じ時代のオランダの女性神秘思想家ハデウィッヒの全集が完結した (Hadewijch, *Visionen* 1924/25; *Strophische Gedichten* I/II, 1948; *Brieven* I/II, 1947; *Mengedichten* 1952, hrg. von J. v. Mierlo, Antwerpen)。オランダ神秘思想の辭引き、乃至は集大成ともいふべきものは、St. Axters, *Geschiedenis van de vroomheid in de Nederlanden*. I. *De vroomheid tot rond het jaar 1300*. II. *De eeuw van Ruusbroec*. III. *De moderne devotie 1380—1550*. Antwerpen 1950—1956。であり、秀逸である。そのそれぞれの巻末にあげられている、一六〇頁を越す文献目録を見れば、オランダ神秘思想の研究が、ドイツのものにくらべて如何に進んでいるかがわかるであろう。これほど規模の大きな文献は、ドイツ神秘思想についてはまだない。また、アクスタースの著作には、屢々ドイツ神秘思想の研究書に見られるようなパトス、情熱、興奮のようなものがなく、對象に向つてあくまで冷靜、即物的である。この態度は、神秘思想の研究にとつて大切であろう。(例えば、このアクスタースの著作と一般によく知られているヴェンツラン・エゲベルトの *Deutsche Mystik zwischen Mittelalter und Neuzeit*, 1946 を比較された)。

オランダの神秘思想家の原典については、殆ど校合本が出ている。ルニスブルクの全集も、新しくルニスブルク協會から出版された (Werke nach der Standardhandschrift von Grootendaal, Hrg. von der Ruusbroec-Gesellschaft, Antwerpen

1944-48. 4 Bde.)。また、今迄、部分的にか知られていなかつた Rede von fünfzehn Graden (Buch der Mimen) のハーゾの古寫本によつて出版された (J. M. Willenmier-Schaff, Dat Boec der Mimen. Leiden 1946)。また「ハーンの娘」のオランダ版も出た (Ibid. Vander Doechere van Syon. Tijdschr. voor Nederlandse Taal- en Letterkunde 67 (1949))。そのほか、オランダ神秘思想家のテキストを讀みたいと思つたものは、次の二つを見よ。St. Axters, *Mystiek Brevier. Het Nederlandsche Mystieke Proza. Antwerpen 1944*。

ヘーメの時代にオランダが常に神秘思想に胸を開いていたように、エックハルトの時代にとつてもオランダの役割は重要である。エックハルトは、オランダの神秘思想家の仲間によく知られていた。とくにエックハルトの異端的な思辨が攻撃されているのは、その證據である。例えば、ヤン・ファン・レイト、ヴェンにとつては、エックハルトは「アンチ・クリスト」であつた (この神秘思想家にとつては、St. Axters, Jan van Leeuwen, Een Bloemlezing uit zijn Werken. Antwerpen 1943) が、エックハルトの周邊に屬するゲースドランクの論集は、殘念ながらまだ出版されていない。これについては、アクスタース前掲書第二卷一七八頁以下を見よ)。

オランダにおけるエックハルトの評價を調べて、エックハルト像を明かにするのは、困難ではあるが價値ある仕事と思つ。この方面の研究としては、一九五四年に出たりユッカーのものが、M. A. Lücker, *Meister Eckhart und die Devotio*

moderna. Leiden. 1950)。ルネースブルク自身も、エックハルトのものと思われ、古寫本を知つて (Berlin, Preussische Staatsbibl. germ. 8. 329 u. a.)、それを異端として攻撃してゐる (全集第四卷四二頁以下)。しかし、ルネースブルク自身、結局エックハルトと同じような思辨を繰返している。暗黒の深淵は、人格神を超えた神性であり、三位一體の「王座」であると同時に「息」であるが、また萬物の還つてゆく終末でもある (全集第一卷五七頁)。

エックハルトの影響は、この神秘思想家の死後百年後、ニコラス・フォン・クザヌスに明確に現われている (Cod. 21)。しかし、これを最後として、エックハルトの生涯やまた教へについて正確なことは、長い間なにも一つ傳へられていない。ヨゼフ・コッホが、その「エックハルトの精神にもとづく四つの説教」のなかで證明したように、エックハルトの神秘思想は、内容的にはクザヌスに殆ど影響を與えていない (J. Koch, Vier Predigten im Geiste Eckharts. Sitzungsbericht d. Heideb. Ak. d. Wiss. Philos.-hist. Kl. 1937)。しかし、クザヌスは、佛敎との對比を許すと思われる興味ある神秘思想家である。とくに、その Non-Aliud の概念は、興味深い。

ヴァレンティン・ヴァイゲルには、またエックハルトの影響が現われている。例えば、ハレの古寫本 (621-69)「心の眞の貧しさ、あるひは諦めたる諦觀」の第三章を見よ。パーゼルのタウラー版一五二一年 (307-308) が、繰返しここに述べられている。エックハルトとヴァイゲルとの關係を扱つ

た唯一のものは、W. Zeller, *Meister Eckhart und Valentin Weigel, Zeitschr. f. Kirchengeschichte* 1938である。最近「ポイケルト」によって全集が企てられているが（全八巻フロマン出版社シエトゥットガルト）、難航しているらしい。ヨーロッパにおける「無」の傳統では、ヤコブ・ベームは重要であるが、これはエックハルトとは直接関係がない。しかし、グニエル・チェブコには、またエックハルトの影響が現われている。テキストとしては「ミルヒ版が秀逸である（Daniel von Czepko, *Geistliche Schriften*. Hrsg. von W. Miich, 1930）。チェブコについての文献は殆どない。アンゲルス・シレジウス（ヨハネス・シェフラー）は、ここに到るまでの神秘思想の集約である。ヘルトによる全集が、戦後新しくまた出版された（*Angelus Silesius, Sämtliche Poetische Werke*. Hrsg. von H. I. Held, 3 Bde. 1949—1952）。ヨハネス・シェフラーはドクター論文の好きなテーマとみえて、論文が多い。

五

ヨーロッパの「無」の思辨は、このように新プラトン主義をうけつぐドイツ神秘思想に求められるのであるが、これにくらべて遙かに自由奔放な「無」の思辨は、カバラの中にある。カバラは、おそらくヨーロッパ中世以降における「無」の最大の源泉であろう。というのも、ユダヤの神秘思想は、カトリックのような教権とは縁がなかつたためである。カバラが、ベームなどの「無」に影響を與えていることは證明できるが、エック

ハルト、ゾイゼ、タウラーなどのいわゆるドイツ神秘思想との關係は明かではない。しかし、前に述べた「アリストテレスの神學」のような無の思辨は、もともとユダヤ神秘思想と新プラトン主義との綜合であるカバラの考え方なのである。ドイツ神秘思想の「無」をみるのには、カバラを知ることが必要と思われるので、カバラの「無」について、簡単に示唆しておきたいと思う。

カバラの「無」は、ユダヤ宗教哲學の「無よりの創造」の考えから發展してきた。神は、萬物を無から創造した。神が已れより他のものを使つて創造するということはあり得ないから、すべては神の自己開展である。故に、神は無より創造する無である。ゾハールの書の「小きき堂」III col. 二八八 a—bでは、隠れたる叡知、はじめのはじめ、聖なる老人は、「無」と名づけられている。初期のカバリスト、ヘロトナのアスリエルの「無」をめぐる論議は、あたかも大乘佛教の論理を思わせる。アスリエルが、一二三〇年書いているところを譯せば、

「神とは何ぞ、と問はるるならば、答ふべし。いかなるときと雖も、缺くることなきもの、と。神のほかに何ぞあるや、と問はるるならば、答ふべし。神のほかに何ものもなし、と。されば、神はいかにして無より有を生ぜしめしや、無と有とのあひだには無限の距離あるに、と問はるるならば、答ふべし。有は無のごとく無の中にあり、無は有のごとく有の中にあれば、無より有を生ぜしものは、何ものも缺くることなし、と。疑ひを懐くものは、創造の書を見るべし。曰く。神は、己れの

無を己れの有としたり、と。神は無より有を創りし、と言ふに非ず。かくて、無は有なり、有は無なること、明かならん。さて、無は、また「擔ひ手」と名づけられたり。されど、有のつながら擔ひ手、そこに無より有のはじまるところは、「信仰」とも名づけらる。その理由いかんと言へば、信仰は目に見え手にとり得る有にかかはらず、また目に見えず手にとり得ざる無にかかはるにもあらず、實に、無と有との合するところにかかはればなり。有は、無よりのみ生ずるに非ずして、有と無は、ともども「無より有」と言はるときの状態を照らし出すなり。有は、無のほかのなにもに非ず。すべては、絶對なる不即不離の單純なる一者に收斂されたり。さればこそ、いましめて曰く、思辨に溺ること勿れ、と (Ecol. 七・一六)。なぜならば、まことにわれらのかよわき有限なる知は、無限なるものとして一體をなすかの究められざるもの完全なを、把へられざればなり」

ドイツ神秘思想家と全く同じように、ヘローナのマスリヘルは、「純粹なる無の只中にまで達する、無限にして涯なく、是はめられざる奈落の底」を語つてゐるが、この無の象徴は、キリスト教徒でもつとも偉大なカバラ信奉者ビロ・デラ・ミラン・ドラでも繰返されてゐる。その「カバラのテーゼ」には、「暗黒の奈落の底の神」というような表現が見出される (Conclusions Cabalisticæ secundum propriam opinionem n. 35)。また、神は永遠にきわめられざる圍である (Jücher, Werke 163)。三十年あまりをカバラの研究に捧げたヨハネス・ロイヒリンに

よれば、神は有でも非有でもなく、しいて名づけるならば、「無の涯なき海」である (De arc. cab. I. fol. 21p)。神性が森羅萬象からはるかに遠ざかり、わが身をかくす無限なひろがりは、さらに、ロイヒリンによれば、「深淵」と同じであり、この象徴は、かくれたる神性の底の底を表わすのである。

絶對者を開展した神と開展しな、深奥にひそむ神 (En Soph) とに分け、後者に否定的な表現や象徴を重ねるのは、カバラの伝統でもある。フランスのカバリスト、アブラハム・ハラパンの息子ダヴィドの定義によれば、自ら原因を持たぬ原因は、無から有をつくりだし、言葉によつて働きかけるのであるが、すべてが再び無に還るときには、ありとしあるものの原因であるものは不二なる單一にあり、無の深みに止るのである。このように、カバラはドイツ神秘思想と極めて著しい類似を示すというものの、兩者の相互關係は、筆者の知るかぎり、殆ど明かにされていない。カバラの「無」の紹介としては、僅か、G. Scholten, Schöpfung aus Nichts und Selbstverschrankung Gottes. Eranos-Jahrbuch 1956 及び H. A. Wolfson, The Meaning of Ex Nihilo in the Church Fathers, Arabic and Hebrew Philosophy, and St. Thomas. Mediaeval Studies in honor of J. D. M. Ford. 1948 のような短い論文が目につくべきなう。カバラ信奉者のテキストに至つては、殆ど譯されてもいなければ、また出版されてもいぬ。ソハールのテキストのドイツ語譯は、Ernst Müller, Der Sohar, 1932 があつたが、抜萃である。最近、一九三三年の英語の完譯が五巻新しく出版

られた (Maurice Simon and Harry Sperling (tr.), The Zohar, 5 vols. London 1956?)

さて、以上エックハルトの周邊、前後の「無」についていくらかなりとも示唆出来たかと思う。このような流れのなかにエックハルトを置いて解釋することも、あるいは可能かと思われる。興味をもたれる方は、それぞれの原典・文献にあたられたい。

(筆者 東京工業大學理工學部〔人文〕専任講師)

彙報

京都哲學會公開講演會記事

昭和三十四年度の京都哲學會公開講演會は、十一月十四日(土)午後一時半より、京都大學文學部第一教室においで、田中美知太郎教授の司會により、左記の通り行われた。

一、ユダヤ民族論……………(京都大學教授) 白井二尚氏

一、「讀書人」身分の「教養」と「倫理」……………(山口大學教授) 湯淺幸孫氏

——中國文化の統一性の基礎——

終了後、樂友會館において、白井、湯淺兩氏を圍んで晚餐會を開き、十時近くまで歓談した。なお、兩氏の講演内容は近く本誌に収録する豫定である。

新着外國雜誌所載論文一覽

新着外國雜誌所載論文一覽

一 哲 學 一

ZEITSCHRIFT FÜR PHILOSOPHISCHE FORSCHUNG,
Bd. XII, Heft 1, Januar-März, 1958.

Russell, B.: Philosophical Analysis

Ebbinghaus, J.: Die Idee des Rechtes

Zocher, R.: Zu Kants transzendentaler Deduktion der

Ideen der reinen Vernunft

Delebat, F.: Das Verhältnis von Sitte und Recht in Kants

großer „Metaphysik der Sitten“ (1797)

Hauptner, G.: Tat und Untat

ZEITSCHRIFT FÜR PHILOSOPHISCHE FORSCHUNG,

Bd. XII, Heft 2, April-Juni 1958.

Löwith, K.: M. Heidegger und F. Rosenzweig, ein Nachtrag

zu „Sein und Zeit“.

Wolandt, G.: Problemgeschichte, Weltentstehungsmythos

und Glaube in der Philosophie Richard Höningswalds.

Oedingen, K.: Der Ursprung des europäischen Rationalis-

mus.

Janssen, O.: Vom Begriff des Seins, seinem Verstehen und